

風船爆弾を作った少女たち

所沢市 内堀ヨシノ

師走の慌ただしく、また、寒い中をここに集まっていただいた坂戸の皆さん、こんにちは、また、ありがとうございます。

私は今年で82歳になりました内堀と申します。今から50年前、群馬県高崎市の農家から縁あって所沢に嫁いできました。姑と8人姉妹が私を迎えてくれました。坂戸は所沢からそんなに遠くはないのに、今日まで足を運んだことはありませんでした。自然がいっぱい残っていて空が広いようです。

戦争の跡も多いと聞きました。ここにくる途中、風船爆弾を作った工場の跡を案内していただき、一瞬その時代にタイムスリップしたような錯覚を覚えました。大久保さんのご好意で、鶴ヶ島の図書館で68年前の風船爆弾の原紙を手にとって、指先に一瞬痛みを感じ、一緒に爆弾を作った仲間に見せてやりたい気持ちになりました。

さて、皆さん。目も耳も悪いおばさんが一体どんな話をするのか興味があると思いますが、どうぞ暫くの間、お耳を貸してください。今、私の手元にあるこの3冊のノートは、68年も前、太平洋戦争の最中、作業日誌として私は毎日書いたものです。生後7ヵ月で27歳だった父を盲腸で亡くし、若かった母は実家に去りました。私は農家の跡取りの子供として、祖父母を父、母と呼んで大事に育てられました。

「戦時中勉強をよそに風船爆弾を作りし友人も傘寿を迎える」、幼馴染みの友人が80歳で出版した歌集の1ページに書かれた歌です。14歳で風船爆弾を作った少女も、82歳になりました。68年たった今、なぜ、風船爆弾なのでしょう。

今日のお話をいただいた時、私は考えました。人様の前で、自分の考えていることや、風船爆弾への思いをお話できるのだろうか。毎日のように何人か

の知人の訃報を聞くたびに、さびしい思いとともに、残された私は何をすべきなのだろう。そうだ、私にできることは、戦争を知らない大人たちや子供たちに、自分が経験したことを語り伝えて行くことと思ひ、この話を引き受けさせていただきました。

「百姓の娘には学問はいらない」という祖父を説得して、憧れの群馬県立前橋高等女学校の狭き門をくぐったのは1943年(昭和18年)の春でした。制服のスカートに付けられた二本の白線が少女たちの夢でした。

新しい教科書を自転車に括り付けて約5キロの道を赤城おろしに真向ってペダルを踏み、ほほを真っ赤にして通学して

いました。「これからどんな世界が待っているのだろうか」。新しい世界に胸はときめいていました。

そのうち太平洋戦争が激しくなり、スカートの白線は無残にもほどかされ、スカートはズボンやモンペに変わり、ネクタイは贅沢品といい取り外されました。英語は敵国語だという理由で無くなり、若い男の先生は次々と戦地に送られ、私たちは悲しい思いで見送りました。そんな中、女学校に風船爆弾製造の命令が下りました。

昭和19年2月5日の(土)作業日誌より

風船爆弾作りが始まった。校庭は板で覆われ、「仕事のことは親にも誰にも話してはいけない」と言われ、不安と緊張で胸はどきどきしました。風船爆弾作りは、原紙作業、補修作業、風船張り作業に分かれ、お互いの仕事はあまりわからなかったように思います。



九条の会さかど 早春のつどい

岩田行雄さんをお迎えしての憲法学習会と語り合い

日時 2月9日(日)10時から15時

会場 坂戸駅前集会施設(2階)

参加費 1500円(食事・飲み物)

一緒に食べて、一緒に飲んで、みんなであうたって!

9条のこと、平和のこと、伝えたいこと、やりたいこと、一人ひとりの思いに耳を傾けましょう。食事と飲み物の用意をしますので、ご参加を2月6日(木)までにご連絡ください(049-283-4723 栗原)

私は最初、原紙作業の職場に配属され、上級生(3年生)と一緒に畳1畳ぐらいの板に和紙を何枚かこんにゃく糊で貼り合わせる作業でした。1枚貼り合わせる毎に和紙と和紙の間に気泡ができないよう手のひらでよくこすりました。

こんにゃく糊は寒さのために凍ってしまい、和紙をこする手の甲は霜焼けでふくらみ、そこにヒビが切れて血が滲んでいました。

板に貼った原紙を1枚1枚背負って空っ風が強い校庭で乾燥させ、乾いたら完成です。その1枚1枚に気泡や穴が無いのか、真っ暗くした教室で1個の裸電球を頼りに、一日中検査をしている生徒もいました。

私の仲がよかった友達は手が霜焼けでくずれてしまって、補修作業に配置替えになりました。こんな作業でも、泣き言は誰もいませんでした。

昭和19年2月8日(火)の作業日誌より

『日本文字の書いてある気球爆弾米本土に落下』私たちが待ちに待ったこと、努力が報いられた。万歳、皆が泣きました。

昭和20年2月19日(月)作業日誌より

伊藤先生から風船爆弾製造が中止になることを聞かされた。今日はいよいよ最後の原紙作りだ。あんなに泣きたいほど大変だったこんにゃく糊も心なしか冷たさをあまり感じない。作業日誌に赤いペンで先生が、「長いことをよくやりました。何事もこのように頑張ってください」と書いてくれた。上級生に最後の糊付けをやらせてもらった。刷毛にも作業台をささえた木の馬にもよくやったと声をかけた。馬や板をこわす金槌の音が早春の校庭に響いた。

昭和20年2月20日(火)作業日誌より

今日のはうれしい休日である。朝5時に起床し掃除や洗濯などをやり久しぶりに女の子に帰ったようだ。

昭和20年2月23日(金)作業日誌より

昭和19年2月5日から始まり約1年余り続いた風船爆弾作りは全部終わった。これからもこの精神を受け継いで頑張ろう。

しかし何か変な気がして、振り上げた手の落としどころに困った。これからは学校工場での無線機の組み立て、手榴弾の袋貼り、校外での農家の勤労奉仕、麦刈り田植え、赤ん坊のお守りが始まる。子供をおぶったこともないお嬢さんがいきなり子供をおんぶさせられて戸惑ったそうだ。この赤ちゃんの父親は、戦地で戦っているそうだ。

学徒動員で早稲田の男子学生も、出征兵士の家に20日間泊まり込んで農作業をした。

私の家は、二人の叔父が陸軍と海軍に出征しているので、2人の早稲田の学生さんが、横須賀と浅草から動員で来てくれました。麦刈り、田植え、馬の世話等、箸より重いものを持ったことのないようなお坊ちゃん達でした。

学生さんの一人は、早稲田大学文学部の教授で活躍して定年を迎えました。もう一人の学生さんには36年

まえの葉書で弟さんと連絡がとれました。不幸にも、昭和21年に腸結核で亡くなられたとのこと。やさしい人でした。

祖父は勉強しないで毎日勤労奉仕ばかりやっている私に「学校をやめてしまえ」と言いました。「おじいさん、学問には時期というものがあります。作物にも種をまく旬というものがあるのと同じで、60の手習いと一口に言いますが、実際60歳で勉強を始めた人はいません。お孫さんに、大事な時期に学校をやめろなんて言わないでください」と何度も頭を下げて頼んでくれました。

お母さんから毎日のように手紙が来て、大切にされていることをよくわかりました。学徒動員で来て、田舎の生活になかなか馴染めずに体調をくずして亡くなった方が他にもあって、そういう人たちを盛大な大学葬で弔ったとのこと。

昭和20年8月5日(日)

今日も良い天気だ。暑い、空襲がなければよいが…登校してすぐ「うーうー」という不気味なサイレンを聞きながら帰宅した。

夜も空襲だった。サイレンの音とともに敵の飛行機B29の爆音が聞こえた。急いで防護服に身を固め、寝ていた祖父母を起こした。むらむらっと敵愾心がわいてくる。「今夜あたりは危ないよ」と本家の叔父さんが言った。

私は防空壕の中に、ふとんやリュックに詰めた食品を投げ込んだ。そして防火用水桶に水を一杯にした。むしろをその水に浸して所々に配った。そして防空壕に避難した。

戦地で戦う二人の叔父の分まで、祖父母と家を守らなければと気を引き締めた。B29は数え切れないほど焼夷弾を投下、「もうだめだー」B29は防空壕の上空から去らない。心臓の悪い祖母に井戸水を飲ませた。祖父が「危ないぞー」と絶叫して防空壕に飛び込んできた。私はモンペ紐を、ぎゅうと縛りなおした。

私の家は、前橋と高崎の真ん中にあり、前橋の夜空を見ると、前橋は赤い字で書いたように彩られ、多くの人の「助けてー」という声が聞こえるようでした。

B29の攻撃はますます激しく、高崎にも爆弾が投下され、そのたびに防空壕が揺れました。敵の攻撃が一時止んで、村の外れまで大勢の人たちが見に行きました。前橋の夜空は赤い火災がもくもく上がり、また高崎の空も照明弾の光で昼間のように明るく、ただ理研鍛造工場の大煙突だけが、夜空に不気味に立っていました。

昭和20年8月6日(月)

早朝、自転車ですぐで学校にかけつけました。利根橋は無事でした。昨日まで作業していた教室や講堂など跡形もなく焼け落ちて、校門だけが残っていました。校庭は焼夷弾がくまなく落ちて刺さり、田植えをした田んぼのようでした。私はただ呆然として…涙も出ませんでした。

前日、ピアノを4、5人でリヤカーに乗せ一里あまり先の農家に疎開させておいたのでピアノは助かりました。明日からはどうなるのかなと頭が一杯でした。

昭和20年8月15日(水)

焼けつくような暑さと雲一つない真っ青な空、私は一生忘れないでしょう。ガッガッと雑音ばかりのラジオ放送で終戦を知りました。日本は負けることなど夢にも思わず米英を憎み、風船爆弾が偏西風によってアメリカ本土を攻撃することを祈って頑張ってきたけれど、結果は無条件降伏でした。

昨日までの正義は全部間違いだ。それなら何が真実なのか、私は混乱し号泣しました。

校長先生は、戦争の責任者として追放されました。

私たちは焼け残った桃の井小学校や理研鍛造工場の一部を借りて授業を再開しました。

英語も復活しましたが、基礎ができていないのでおざなりなものでした。(続く)

.....

【参加者の感想から】

◆ 新井安史さんの学生時代の通学や服装や生活の場面がありありと思い出されました。電車がガソリンカーだったとか戦後の混乱の中の様子、坂戸町駅や越生線の殺人的混雑など、その頃私の兄も雑納袋を下げていたことが記憶にあります。現在の坂戸駅は昔の坂戸町駅の面影は全くなく数年前より近代的な明るい駅舎に生まれ変わりました。これも平和憲法があればこそですね。ありがとうございます。(浅井時子)

◆ 戦時中風船爆弾を作った少女時代の貴重な記録でした。さすがエリート出身校の生徒だったんですね。目に見えるような場面が私の脳裏を走馬灯のように駆けめぐりました。また、私は前橋の隣の渋川出身ですので、とても身近に感じました。前橋空襲の時は子供心にも隣の火事のごとく怯え、震えて母親にしがみついて真っ赤に燃える空を見ていた記憶が残っています。最後にこの記録を残して下さった内堀ヨシノさん、ありがとうございます。(浅井時子)

◆ 内堀さんのお話や会長の方の話をお聞きし、涙が止まりませんでした。少年少女を軍国少女、軍国少年に変えたものは何だったのかという問いかけに、人の運命を変えていく政治社会に怒りを覚えました。人間が人間らしく生きられる真に豊かな社会を作っていかなければとあらためて思いました。(塚越 小野沢義雄)

◆ 初めて聞きました。途中涙が止まりませんでした。一言一言を聞き漏らすまいと思ってきました。戦争はだめだと言いながら、何も語れない、戦後生まれの私にとっては、このような話を聞いたことはよかったです。まわりに伝えていきたいです。内堀さん、本当にありがとうございます。

◆ 私も新井さんと同じ昭和21年中1(商業高校)でした。戦闘帽などという名称も何十年ぶりで聞き、平和ボケ、バブル漬けに浸っていたことを気付きました。また何年か先には戦闘帽が流行りそうな情勢に今立っていることにも誰もが気づかねばならないと思います。

◆ 坂戸越生線の歴史を知りました。こういう事実を伝えなければと思います。内堀ヨシさんの話は、戦争中に引き込むほど強いものがあります。3冊の日記、よく保存しておいてくださいました。ぜひ記録を残して欲しい。(相馬)

◆ 私は1941年12月生まれ。内堀さんの話はよくわかりました。父はシベリアで病気になる、大変な思いで帰りました。

◆ 荒井さん、内堀さん、お二人の貴重なお話しに感動しました。「戦争語り継ぐ」を続けておられる九条の会さかどの皆さんに学んでいきたいと思えます。若い世代にどう伝えていくかが課題だと思いますが、まずは経験者(体験者)が語るということが出発点。お二人の固い決意は、必ず伝わると信じます。日常会話の中に政治的なことも入れて話していき、特定秘密保護法の成立した日も忘れないでいきたいと思えます。(川越から)

◆ 私は戦後生まれでありますので、自分自身は平和の中で暮らしてきました。父は6年間軍人として中国に行っていました、何も語りませんでした。今日のお話を聞き、父は語れなかったのだと思います。今、秘密保護法が国会の自公政権の力でごり押しされてしまい、お話を聞きながら本当に恐ろしくなりました。70%~80%の国民が反対及び疑問に思っているのです。再び戦争する国にならないように私も頑張ります。

◆ 風船爆弾を作った人の話を聞くのは初めてでした。本当に何も知らされないで作業にあたっていたんだと改めて認識しました。テレビ放送で風船爆弾の被害者がいたことを知るなんて…内堀さんは相当なショックを受けられたらだろろうと思えます。戦争は嫌です。

◆ 戦争は嘘で始まり嘘で終わる許されない無知な行為。これを進めようとしている官僚はアメリカの言いなりになっている。息苦しい声が近づいている。大きな声を出してずっと諦めずに知らせていく。憲法を暮らしの中に、戦争がどんなものか、どんなに恐ろしいものか、しっかりと反省して生きていくために。生きたい子孫のために。内堀ヨシノさんの15歳の経験を軽い政治家や官僚の前で話せたらに同感です。(所沢 岡田尋子)

◆ 戦前・戦中の少年時代「軍国少年」の記憶の断片を語り継ぐ場所として、どんなことを話し合うのかと初めて参加。今の国会(地方議員)や安倍政権の総理・閣僚、全員、戦争の悲惨な経験を知らない世代がこの国を動かしている! 本当に恐ろしいことです!(末広町 市原芳明)

- ◆ 今日も大変貴重な話を聞かせてもらい、感動しています。戦争知らない世代として、戦争が無い世の中作りの努力をして行こうと思っています。
- ◆ 新井安史先生のお話し。越生線がガソリンカーの時代からの歴史のお話しに、想像しながら今現在の東上線の技術進歩や安全運行にお世話になっているのだなど実感したお話しでした。本当にありがとうございました。
- ◆ 「戦争の中に生きた少女 私も風船爆弾を」の内堀ヨシノさんのお話しに、とにかく感動しました。当時の日記を持って来ていて、その日記を見て、個人の記録であってもこうして役立つこともあるんだと、貴重なお話しを聞かせていただき誠にありがとうございました。ニュースの連載にも期待しています。(伊原 求)
- ◆ 今日お誘いいただき、豊島区から参加させていただきました。新井安史さんの通学時のお話し。電車の乗り方がわかりやすく、少し前の時代がわかりました。内堀ヨシノさんの風船爆弾のお話しは、平常心では受け入れられないほどあまりにひどい時代の恐ろしさに言葉に出せない感動を受けました。貴重なお話しをありがとうございました。安倍内閣をしっかりチェックしていきたい。
- ◆ 新井さんの「ああ、坂戸町駅」。少年の目に映る当時のリアルな状況、心境。日本の歴史の真実、人々の生きた歴史、このような少年の視点、初めて聞く郷土の歴史でもある。内堀さんの少女そのままの声で思い出を語る風船爆弾の話。日誌に記した戦時中の銃後の生活。胸迫る日本の歴史。日本中に伝えた。感動、胸いっぱい九条の集いは初めて。

【投稿】「秘密保護法」の強行採決に思う

末広町 石川裕一

これまでも闇の中の「秘密」

国会内の圧倒的多数におごり、自民・公明と党は維新の会とみんなの党に補完され、肝心な部分を明快にしないまま「秘密保護法」の採決を強行した。「国民の安全を保障するために早く決定を」が言い分だが、とんでもない「ごまかし」と言わざるを得ない。これまでも国民の安全に関する秘密は多々あった。例えば「核兵器持ち込み」や「沖縄返還交渉」に関する「密約」にしても、アメリカ側がその存在を認めているにも関わらず日本政府は存在を否定し続けた。これからは更に日米安保条約も含め秘密は国民に知らされず、一方的に「いつか来た道」へ歩み出す危険性が増すことは明白ではないだろうか。また、日本の主権を侵害する米軍の「特別地位協定」は多くが闇の中である。その膨大な費用負担は国民に苦しみを与えている。

条文は変えず事実上の改憲

衆議院選挙後、自民・公明政権は「憲法第46条改定」「集団的自衛権を憲法解釈で」を立て続けに提起し続けてきた。いずれも「第9条」の事実上の改定が目的

であったが、その卑劣な企みは「改憲賛成の人達」からも支持されず、たくらみは水泡と帰した。それだけに「秘密保護法」は維新の会やみんなの党の了解も取り付けて一気に押し切ったのである。自民党の幹部は「憲法条文の改定にとらわれず、実力で事実を作り上げればよい」と断言していたが、その一例が今回の強行採決だったと思う。日米安保条約に基づいて「日米軍事力の強化」を推し進めることで憲法9条を形骸化し、やがて口実を設けて「海外で戦争する可能性」はかなり強くなった。国民の平和的生存権も「社会保障の全面改悪」で憲法第25条の「国の義務」は消滅の方向に向かっている。

地域での草の根運動を粘り強く

情勢は厳しいけれど「国民の諸権利を守ろう」とする力は、全国で繰り広げられて行動にも表れている。現象面にとらわれることなく、学び合い・語り合う中から行動への自信と実現への確信を強めること、身近な人達と地域で一致できる具体的な要望を明確にして掲げ、その実現に向かって一歩ずつ歩いていくことが強く求められているのではないだろうか。

坂戸の戦跡(3)「飛行場のペトン」

千代田 大久保俊秀

ペトンという言葉は、初めて聞く人がほとんどだと思います。私も、陸軍坂戸飛行場最後の飛行兵加藤中外氏(千代田在住)から案内されるまで知りませんでした。ペトンは、中国景德鎮の陶土でアスファルトの代用品として使用され、地下2メートル以上の深さまで入れられ、更にその下には直径20センチメートル程の玉石が埋められています。

格納庫から出た飛行機の待機場で、滑走路に向かう飛行機が方向転換をするため、飛行機の重量に比



して車輪が小さいため、過酷な重量に耐えられるよう堅牢に造られました。飛行場の建設にどれだけ莫大なお金が使われたのか想像もつきません。

坂戸中学校の裏門前にある市役所公用車駐車場と、その東側の司法書士事務所脇に入った駐車場の2カ所に残存し、いつでも見て触れることができる貴重な戦跡です。

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

1月23日(木)10時~12時、2月20日(木)10時~12時

北坂戸出張所内「坂戸市民活動交流フロア」会議室(溝端公園に面した「埼玉りそな銀行の看板」が目印)